

# 山形大学周辺における 暮らしの安心・安全に 関するアンケート 第1次報告書 2019年6月

国立大学法人山形大学人文社会科学部 YU-COE  
「山形大学先端的研究拠点」(M)地域社会に  
おける安心・安全に関する学際的研究拠点

代表：大杉尚之（人文社会科学部・准教授）

〒990-8560 山形市小白川町1-4-12

TEL：023-628-4203（人文社会科学部 総務担当）

E-mail：anshinp2018@gmail.com

ウェブサイト(YU-COE)：http://www.yamagata-u.ac.jp/kenkyu/yu-coe/yu-coe.html

## 1. はじめに

昨年は、年末の大変お忙しい時期にもかかわらず、私たちが実施いたしました調査にご協力いただき、誠にありがとうございます。皆様のご理解により貴重な調査結果を得ることができました。心より感謝申し上げます。このたび、調査結果の第1次報告書を作成いたしましたのでご覧いただければ幸いです。この報告書は、主な質問項目について基本的な集計結果を要約することで作成いたしました。

## 2. 「山形大学周辺における暮らしの安心・安全に関するアンケート」について

本調査は、山形大学小白川キャンパス周辺にある山形第五小学校の保護者の方と山形大学生を対象に2018年12月と2019年1月に実施しました。調査票の回答をお寄せいただいた保護者の方は166名、大学生は201名でした。

## 3. 内容をご覧いただくにあたって

各図表の数値は、とくにことわりがない場合には、全回答数に対する割合です。ただし、小数点以下を四捨五入しているため、合計が100%にならないこともあります。また、この報告書の数値は速報値であり、今後の一部修正される可能性があります。そのため、他所で引用される際は事前にご一報いただきますよう宜しくお願いします。その他、ご質問、ご感想などがありましたら、上記のアドレスまでお寄せください。

## 4. 暮らしの安心・安全

### 4.1. 暮らしの安心・安全意識

安心して暮らせているかを尋ねました（図 4-1）。五小保護者の方々の不安感が高いのは、順に「地域の衰退」「社会保障」「交通事故」となっています。一方、山大生では相対的に「災害」「犯罪」への不安が高くなっています。

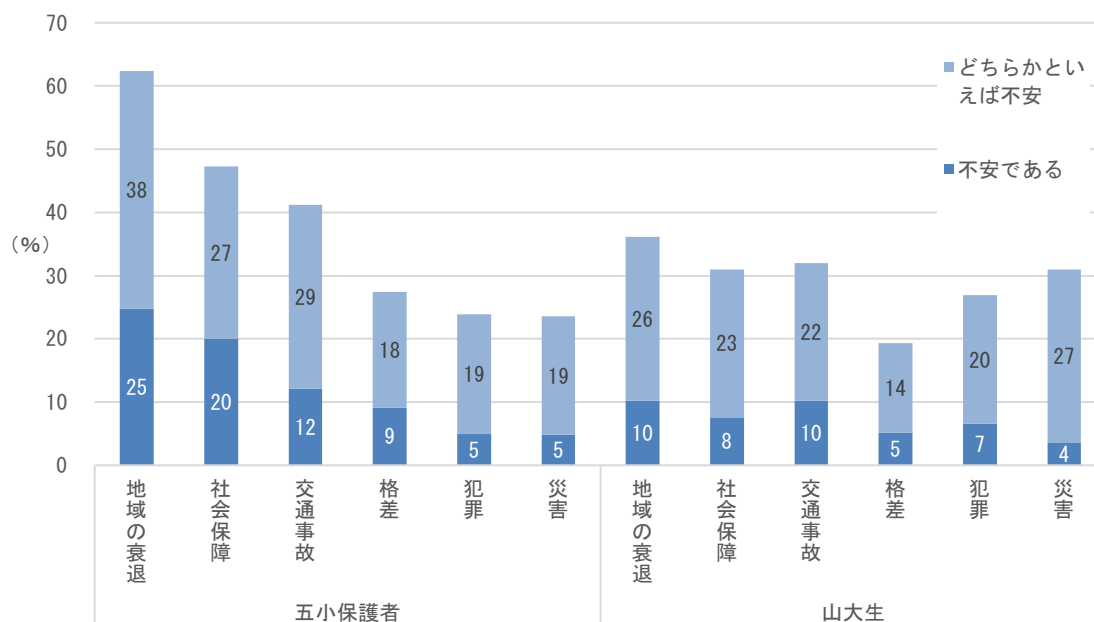


図 4-1 不安に感じていること

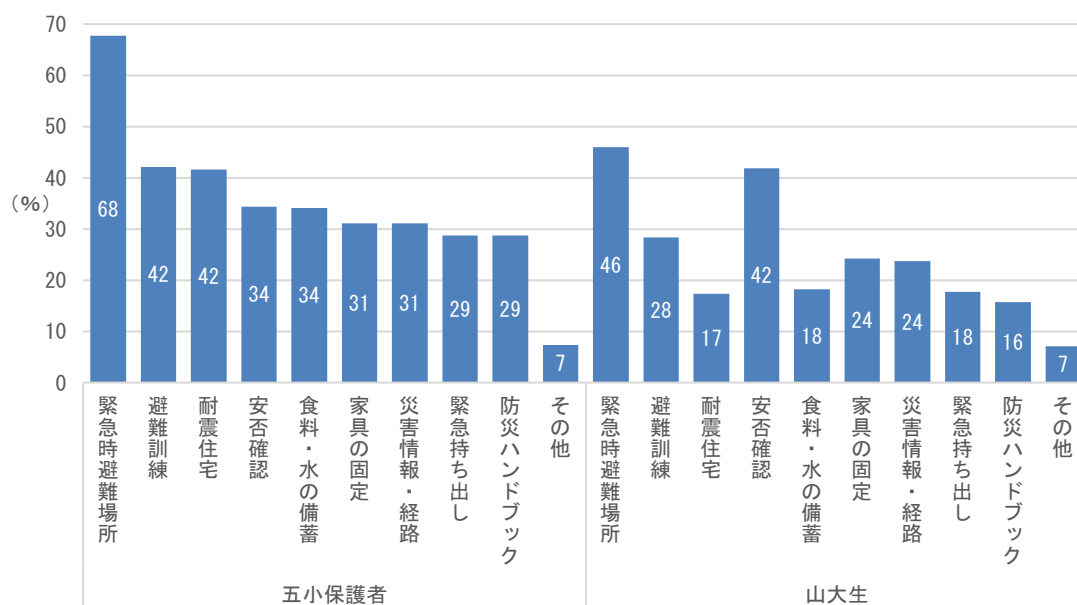


図 4-2 災害への備え（本人が「している」の%）

さらに、災害に対する備えについてたずねました（図 4-2）。「緊急避難場所の確認・確保」は五小保護者の 68%、山大生の 46%が「している」と答えています。しかし、多くの備えについて、五小保護者でも山大生でも 2 割から 3 割程度しか実行していない様子です。「安否確認方法の確認」「食料・水等の備蓄」「災害情報や避難経路の確認」「緊急持ち出し用意」など、普段からできる備えを徹底する必要があるようです。

#### 4.2. 災害時と日常の人的ネットワーク

災害時や日常の援助が得られる知人の数についてたずねました。五小保護者についてみると（図 4-3）、災害時に助けを求められることができる知人が「いない」との回答が徒歩圏内で 29%、山形市内で 23%です。また、日常的に子どもの面倒をお願いできる人が「いない」との回答が 60%を占めています。災害時に市内の親族に助けを求められることができる人は半数程度にとどまっており（図は省略）、普段から親族以外のネットワークを構築することが求められます。

山大生（図 4-4）でも、災害時に助けを求められることができる知人が「いない」の回答が 2 割前後を占め、家族と同居していない学生の場合は不安要素となることが考えられます。

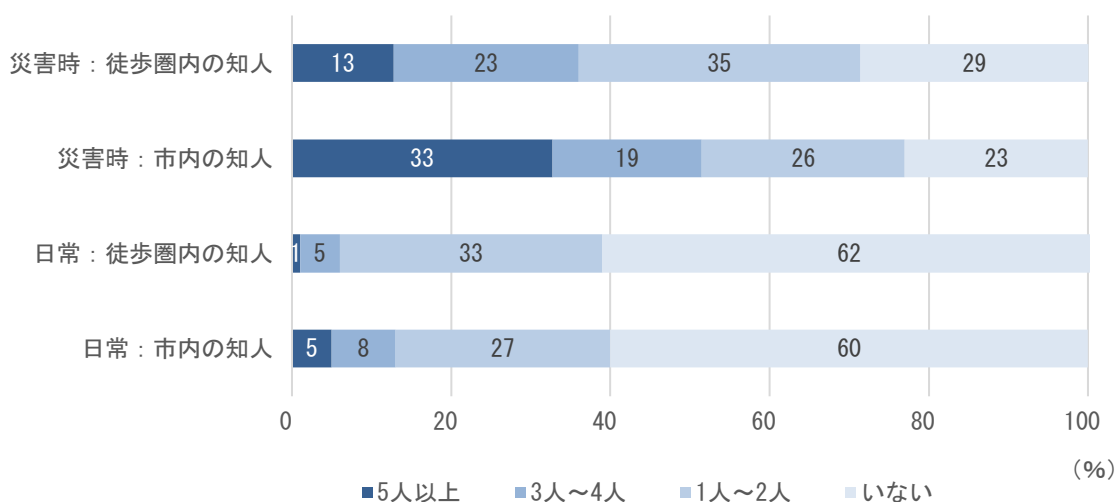


図 4-3 災害時の援助や日常的な子どもの面倒をお願いできる知人の数（五小保護者）

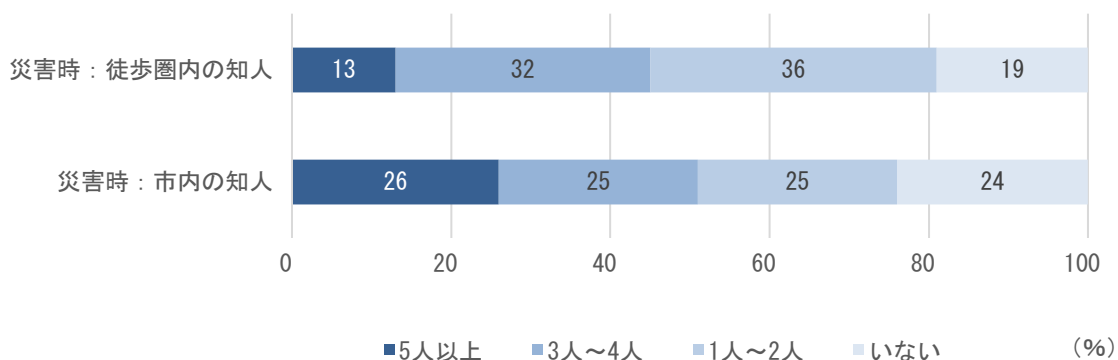


図 4-4 災害時の援助をお願いできる知人の数（山大生）

### 4.3. 日常的な問題と相談相手

援助や相談相手がほしいとき、どのような人や機関を頼りにするかたずねました(表 4-1)。五小保護者では、全般的に「配偶者」「自分の親」が多く、精神的な悩みは「友人や職場の同僚」にも相談することが多いことがわかりました。山大生では(表 4-2)、全般的に「自分の親」に相談することが多い一方で、精神的な悩み、人間関係の悩み、勉強や成績の悩み、進路や就職の悩みについては大学(または大学以外)の友人・知人に相談することがわかりました。また、いずれのグループも約1割は「誰もいない」と答えていました。

表 4-1 日常的な問題と相談相手 (五小保護者 複数回答あり)

	配偶者	自分の親	自分の兄弟 姉妹	自分の子ども	配偶者の親	配偶者の兄弟 姉妹	その他の親族	友人や職場の 同僚	近所(地域) の人	専門家や サービス機関	誰もいない
精神的な悩みや心の健康の問題を抱えて、落ち込んだり、混乱した時	64%	53%	28%	13%	12%	5%	4%	53%	2%	8%	6%
急いでお金(30万円程度)を借りなければならないとき	46%	62%	22%	1%	21%	5%	5%	1%	0%	6%	10%
あなたや家族の誰かが病気や事故で、どうしても人手が必要なとき	62%	76%	38%	12%	39%	21%	11%	16%	6%	9%	5%

表 4-2 日常的な問題と相談相手 (山大生 複数回答あり)

	自分の親	自分の兄弟 姉妹	その他の親族	大学の友人・ 知人	大学以外の 友人・知人	大学の教員や 職員	近所(地域) の人	アルバイト 関係者	専門家や サービス機関	誰もいない
精神的な悩みや心の健康の問題を抱えて、落ち込んだり、混乱した時	55%	19%	7%	67%	46%	4%	0%	6%	2%	9%
人間関係で悩んだとき	44%	17%	3%	67%	48%	4%	1%	6%	1%	9%
大学の勉強や成績で悩んだとき	37%	13%	2%	68%	30%	14%	0%	3%	0%	9%
将来の進路や就職について悩んだとき	73%	16%	8%	60%	40%	20%	1%	7%	1%	5%
急いでお金(30万円程度)を借りなければならないとき	87%	9%	10%	4%	4%	2%	0%	1%	5%	9%
あなたや家族の誰かが病気や事故で、どうしても人手が必要なとき	65%	38%	47%	25%	23%	1%	5%	5%	6%	6%

#### 4.4. 精神的な悩みに関する相談窓口の認知度

精神的な悩みや心の健康の問題に関する相談窓口の認知度をたずねました（図 4-5）。五小保護者では「山形いのちの電話」は6割近くの認知度がある一方、その他の窓口の認知度は1割以下でした。

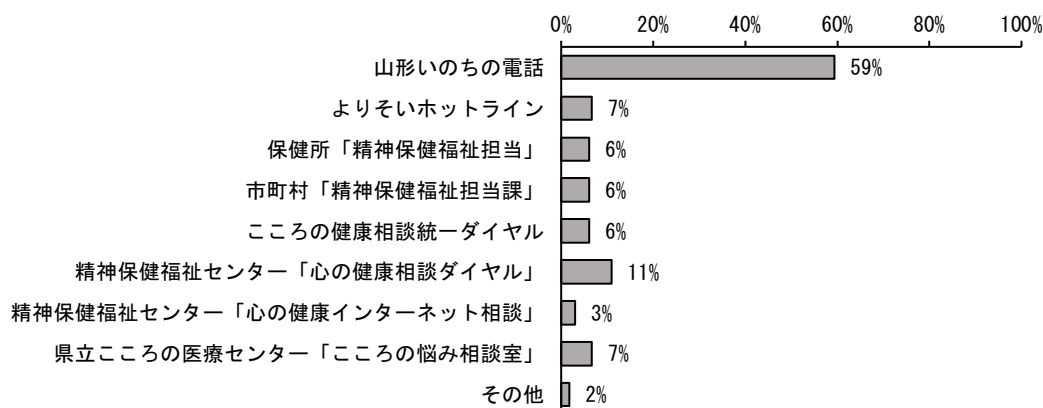


図 4-5 精神的な悩みに関する相談窓口(五小保護者 複数回答あり)

山大生では、学内相談機関（図 4-6）は6割から7割の認知度がある一方で、学外の相談機関（図 4-7）については「山形いのちの電話」も2割程度でした。

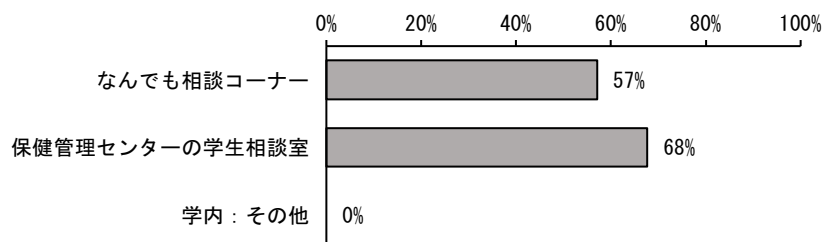


図 4-6 学内の精神的な悩みに関する相談窓口(山大生 複数回答あり)

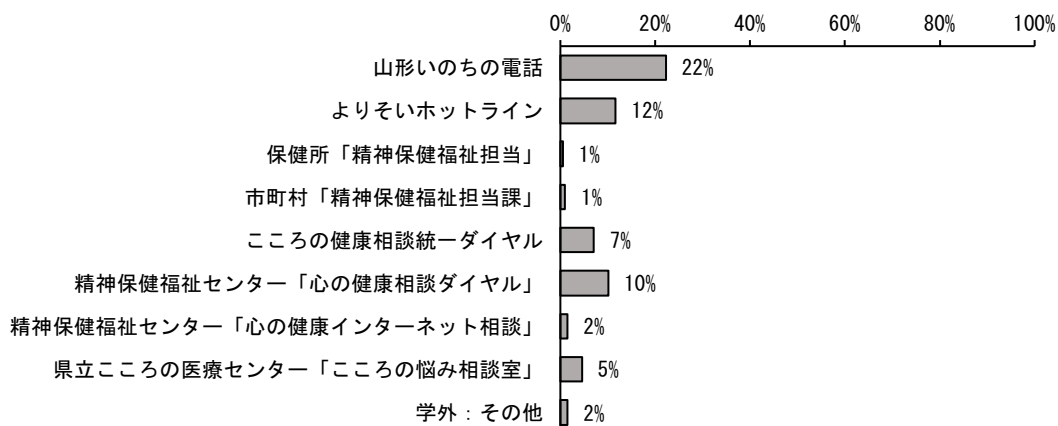


図 4-7 学外の精神的な悩みに関する相談窓口(山大生 複数回答あり)

## 5. 防災情報の入手と避難

### 5.1. 公開されている防災情報の認知

ハザードマップ（洪水や地震時の避難地図）は全世帯に配布されていますので、五小保護者の60%は「見たことがある」と回答していますが、山大生では見たことあるのは23%であり、「見たことない」と「覚えていない」を合計すると76%の学生がハザードマップを認知してないことがわかります（図5-1）。また、山形市が発表している防災情報の入手については、五小保護者では「よく入手する」、「時々入手する」と「あまり入手しない」、「全く入手しない」がほぼ半数となりました（図5-2）。一方、山大生では、「あまり入手しない」、「全く入手しない」が75%の学生が回答しています。ハザードマップの存在と山形市が発表している防災情報の入手の現状から見て、防災情報の認知はそれほど高くはないと思われます。災害に備えて、ハザードマップや山形市が発表している防災情報を確認されることをお勧めします。

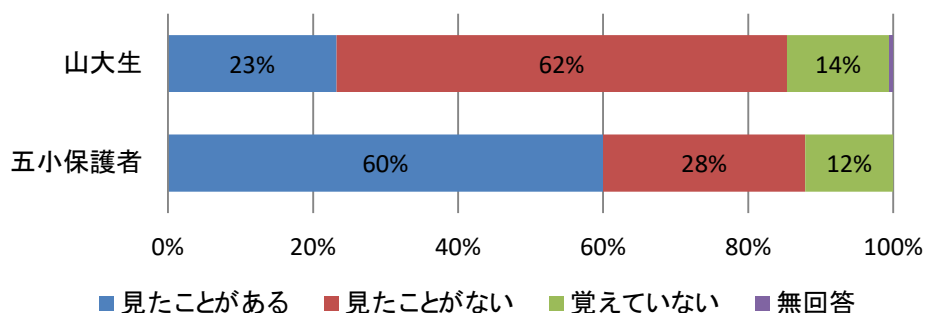


図5-1 洪水や地震時の避難地図（ハザードマップ）の存在

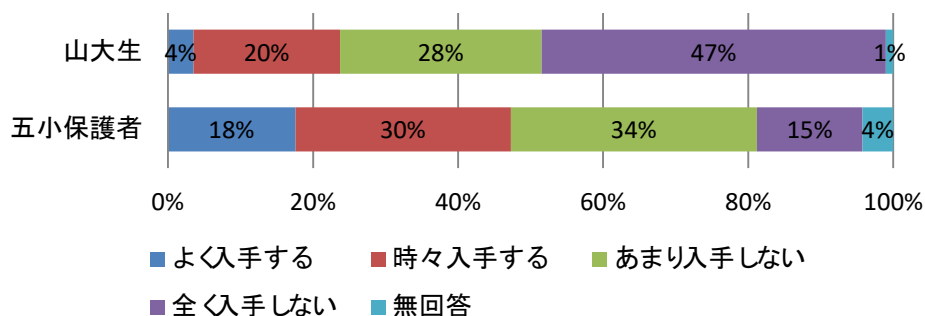


図5-2 山形市が発表している防災情報の入手

### 5.2. 災害情報の入手と避難場所

五小保護者と山大生の両者に、現在お住いの場所（自宅、アパート、寮など）のご近所の方と災害・防災に関して情報交換をすることはあるのかをたずねました。五小保護者、山大生ともに、「あまりしない」、「全くしない」が90%以上になりました（図5-3）。ご近所との情報交換は、町内の防災や避難などに役立つ情報の入手できる可能性があるとともに、災害時には、ご近所の方々の助け合いが必要だと思っておりますので、日ごろから災害・防災に関して情

報交換することをお勧めします。

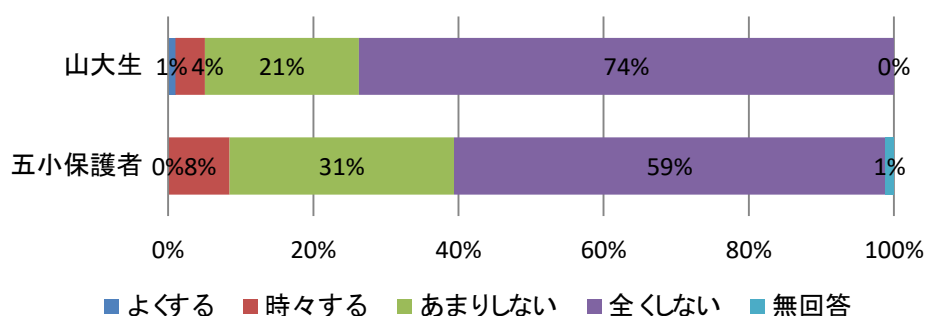


図 5-3 ご近所の方との災害・防災に関する情報交換

気象情報、地震情報の入手に関しては、五小保護者、山大学生ともに 80%以上が「よく入手する」、「時々入手する」と回答しています(図 5-4、図 5-5)。しかし、地震発生時の避難場所情報に関しては、五小保護者で「よく入手する」、「時々入手する」が 37%に対して、山大学生では 25%となっています(図 5-6)。五小保護者と山大学生の両者に、災害が発生して自宅が危険だと判断した場合に、最初に避難する場所をたずねました。五小保護者では小学校(50%)、山大学生では高等学校・大学(34%)に避難すると回答した方が最も多く、災害が発生した場合には、多くの住民が学校に押し寄せる可能性があることがわかりました(図 5-7)。災害が発生した場合には、まずは公園などの一時避難場所に避難することも考えられます。災害が発生してからでは、避難場所の情報を入手できない場合もありますので、自分の住んでいる地域の避難場所(一時避難、収容避難、広域避難)とそこまでの経路を確認しておいてください。

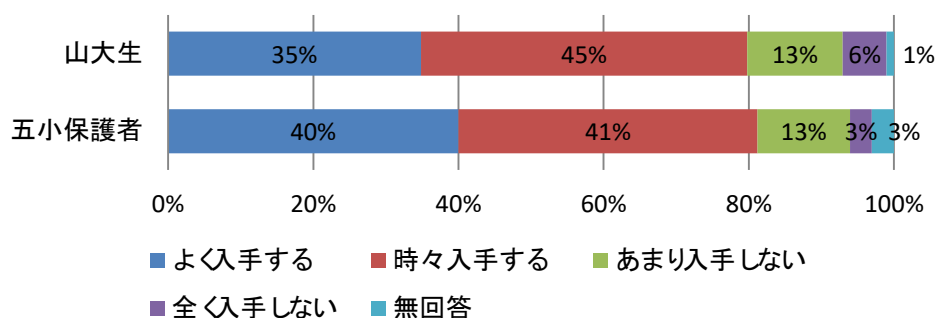


図 5-4 日頃からの気象情報の入手

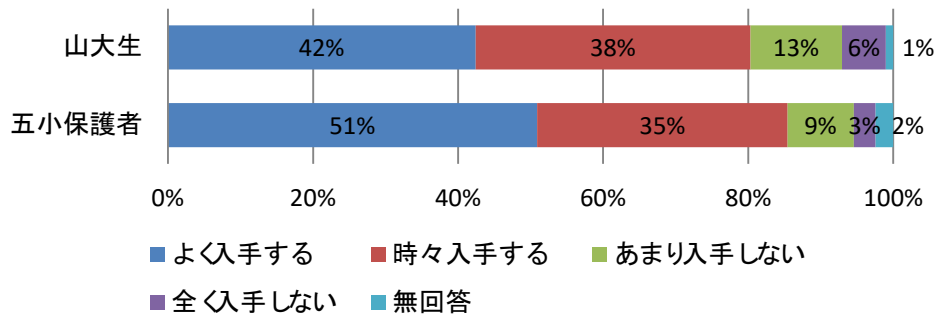


図 5-5 日頃からの地震情報の入手

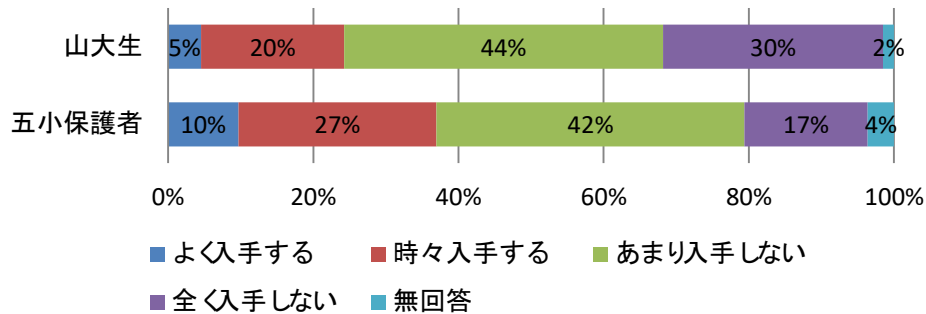


図 5-6 日頃からの地震避難場所情報の入手

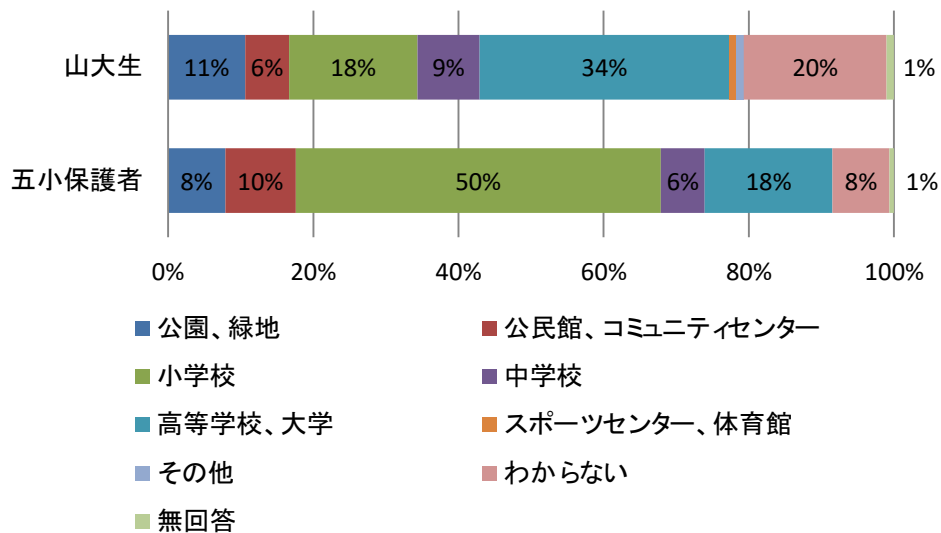


図 5-7 災害が発生した場合の最初に避難する場所



## 6. 山形大学や山大生との関わり

### 6.1. 山大生の印象とトラブル懸念

五小保護者に、山大生の印象をたずねました(図 6-1)。4 割近くの方が山大生の規範意識の低下をときどきは感じているようでした。また、若者が地域に多く住んでいることを肯定的に感じている方も多いようでした。山大生の振る舞いに対する不安経験(図 6-2)は、「よくある」「ときどきある」「たまにある」を合わせると 7 割程度でした。将来のトラブル懸念(図 6-3)は 6 割の人が少なくとも「たまにある」と感じているようでした。

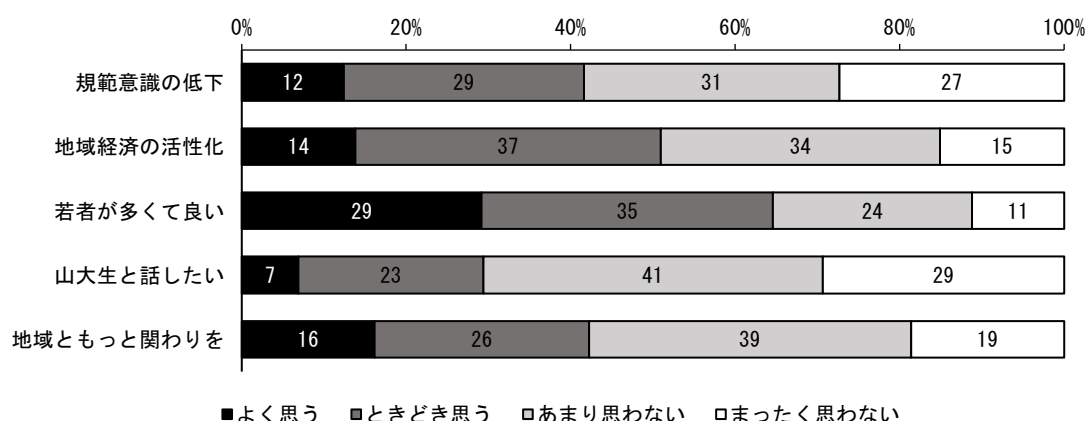


図 6-1 地域住民が抱く山大生への印象 (五小保護者)

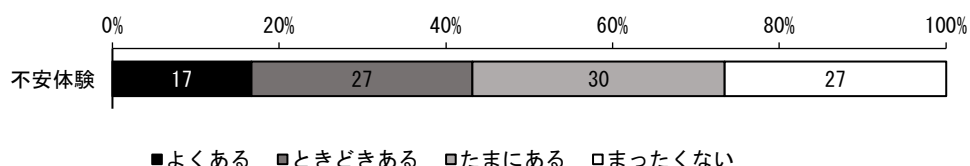


図 6-2 山大生の振る舞いに対する不安経験 (五小保護者)

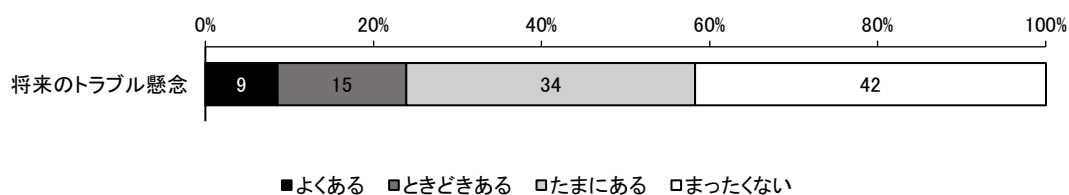


図 6-3 山大生の振る舞いに対する将来のトラブル懸念 (五小保護者)

不安経験の具体的な内容について、前回の調査で指摘が多かった自転車の運転に関してたずねました(図 6-4)。3 割から 5 割の方が自転車の運転に危険や不安を感じたと回答しており、自転車の運転に関する問題は改善していないと考えられます。その他の不安経験の項目では(図 6-5)、騒音の問題と歩道や車道を歩くマナーの問題、歩道や車道をふさいで歩く、歩きスマホなど歩行者のマナーの問題の回答が多くなりました。

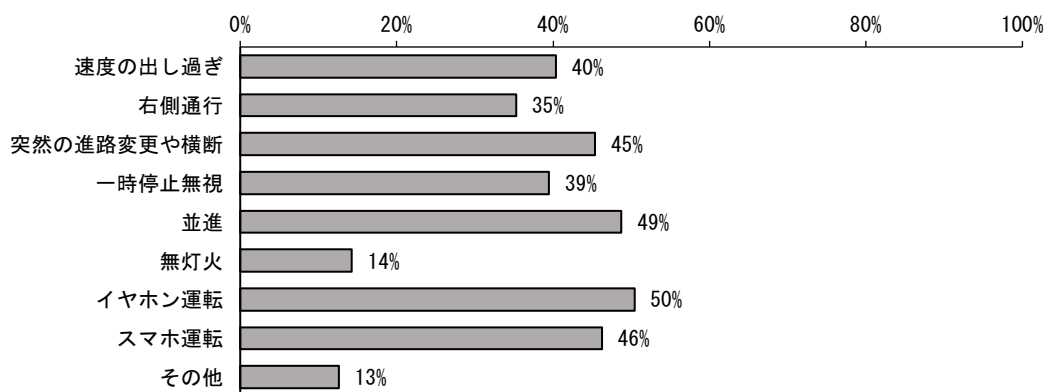


図 6-4 自転車に関する不安経験の内容（五小保護者 複数回答あり）

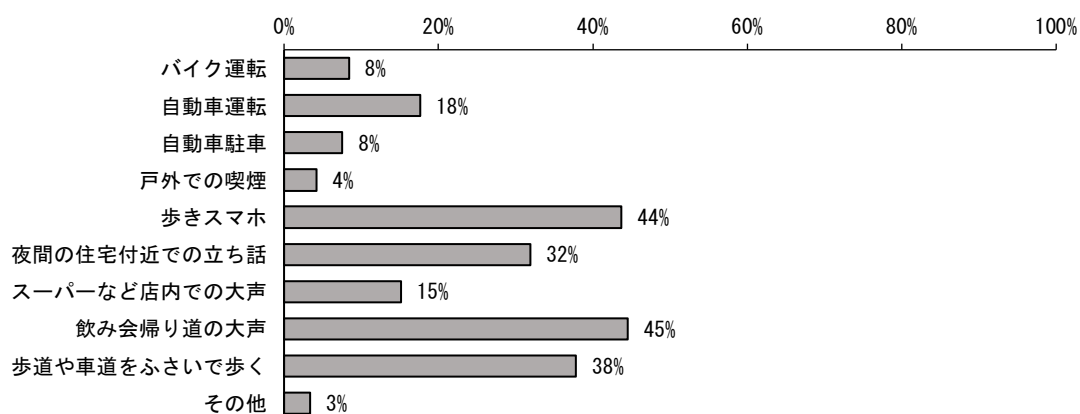


図 6-5 その他の不安経験の内容（五小保護者 複数回答あり）

## 6.2. 山大生とボランティア・地域活動

五小保護者の方々に、山大生にどのようなボランティアや地域活動をして欲しいについて複数回答でたずねました。図 6-6 によると、「地域に住む子どもを対象とした活動」が約 56%と最も多く、つぎに「地域におけるスポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動」、「地域づくりのための活動」が多くなっています。小学生の保護者という立場から、山大生には子どもが対象、または対象になりやすい活動を期待していると考えられます。

山大生にはボランティアや地域活動について、興味がある活動と大学入学後にしたことがある活動を、複数回答でたずねました。図 6-7 で、興味のあるボランティア・地域活動（青色の棒）についてみると、「地域におけるスポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動」が約 43%と最も多く、つぎに「地域づくりのための活動」、「地域に住む子どもを対象とした活動」が多くなっています。一方、実際の経験（オレンジ色の棒）についてみると、「地域づくりのための活動」をしたことがある学生が約 24%と最も多くなっており、具体的な活動分野について興味と実態でやや異なっていることがわかります。

また、約 56%の学生は「入学後、ボランティア・地域活動をしたことがない」と回答していますが、「ボランティア・地域活動には興味がない」学生は約 19%でした。このことから、興味はあるものの行動につながっていない学生が、一定層存在していることがわかります。

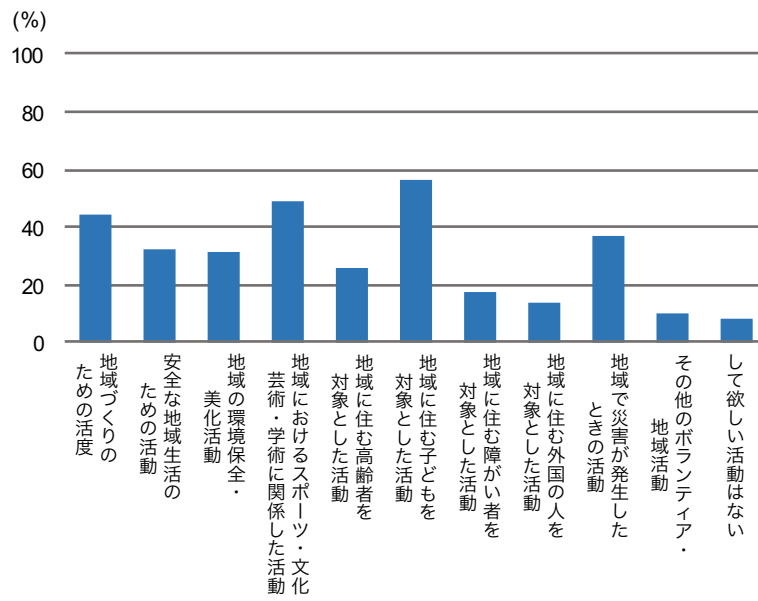


図 6-6 山大学生にどのようなボランティア・地域活動をして欲しいか

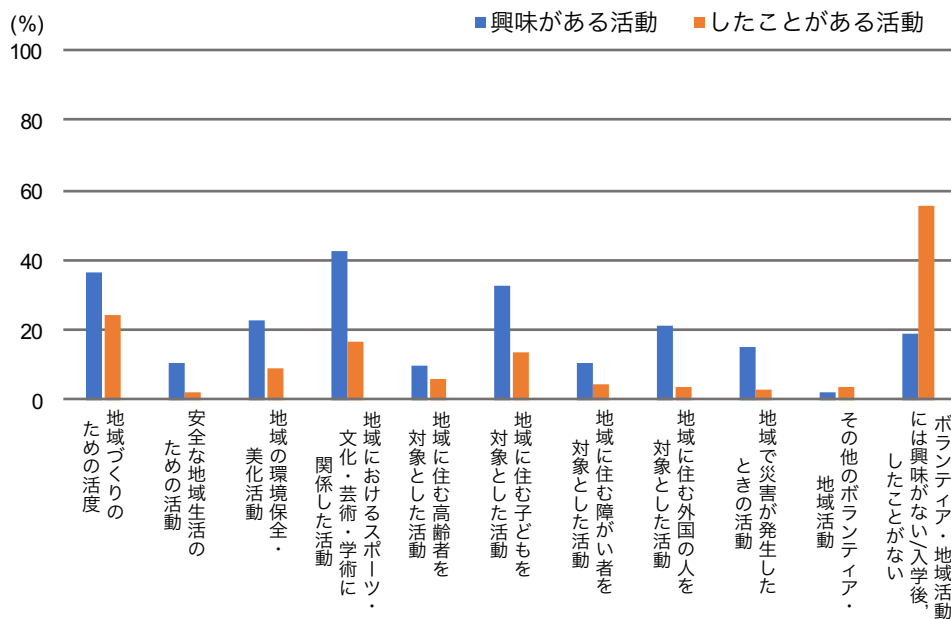


図 6-7 山大学生が興味のある/入学後、したことがあるボランティア・地域活動

## 7. 全体的な傾向について

**暮らしの安心・安全** 将来の生活に関わる問題や交通事故に比べて、災害への不安は低い傾向でした。災害時に助けを求めることができる知人は少ないようでしたが、親族を頼りにできない場合もあり、日常的な関係性からネットワークを構築するが望まれます。山大生では、災害への備えは家族まかせが多いようでした。ひとり暮らしの学生や通学時間のかかる学生もいることから、普段の生活のなかの防災について、自ら取り組むことが大切でしょう。

精神的な悩みの相談相手として友人や知人（または職場の同僚）が多いようでした。相談できる人間関係を構築するとともに、誰もが相談を受ける立場を担うことを意識する必要がありますでしょう。また、相談相手がいない方もおり、相談を必要としている人と相談機関をどのように結びつけるか対策が必要です。

**防災情報の入手と避難** ハザードマップの認知度や山形市が発表している防災情報の入手に関する調査では、五小保護者の5割～6割は「見たことがある」または「入手している」と回答している一方で、山大生は2割程度でした。地震発生時の避難場所情報に関しては、五小保護者で4割程度、山大生の2割強程度しか入手していないようです。また、こうした地域の情報に関する山大生の認知度の低さは、災害時に避難する場所に反映されており、ひとまず大学に行く、あるいは非難する場所が分からないと答えた学生が全体の5割を超えています。災害・防災に関する情報交換を行っていない学生が7割を超えることも併せ、地域住民としての意識が山大生には欠けていると言わざるをえません。高齢化が進む地域において、学生は災害時における有望なボランティア要員であり、地域住民の一人であることを学生に意識させていくことは今後の課題の一つであると考えています。

**山形大学や山大生との関わり** 山大生の振る舞いに関する不安経験として、五小保護者の約4割が「自転車の運転」、「騒音」、「歩行時のマナー」をあげていました。これらの項目は2013年度の調査でも指摘されており、慢性化しているようですので早急な対策が必要です。

山大生によるボランティア・地域活動について、保護者の方々は、山大生に「地域に住む子どもを対象とした活動」を期待していました。しかし、「子どもを対象とした活動」に興味がある山大生は多いものの、実際に活動した学生は多くありませんでした。山大生の興味を実際の行動につなげる仕組みが必要といえます。

## 8. おわりに

皆様からお寄せいただいた回答をさらに分析し、安心して暮らせる地域社会のあり方について今後も検討してまいります。今後の進展については表紙に記載されたウェブサイトにて随時お知らせする予定です。

### YU-COE「山形大学先端的研究拠点」(M)

#### 地域社会における安心・安全に関する学際的研究拠点

- [代表] 大杉尚之（山形大学人文社会科学部准教授、認知科学）  
山田浩久（山形大学人文社会科学部教授、地理学）  
阿部晃士（山形大学人文社会科学部教授、社会学）  
竹内麻貴（山形大学人文社会科学部講師、社会学）  
本多 薫（山形大学人文社会科学部教授、情報科学）  
小林正法（山形大学人文社会科学部准教授、行動科学）（2019年度より）